

# 世界農業遺産における旧品井沼周辺ため池群の役割

## -里山里地で受け継がれる魚たち

シナイモツゴ郷の会  
安住芳朗・高橋清孝

近代化の中で失われつつある農業・農法や生物多様性などを、「生きた遺産」としてその保全と持続的な活用を図り、次世代へ継承していくため、大崎耕土の農業システムがFAOにより、2017年12月に世界農業遺産として認められた。私たちが生態系保全に取り組んでいる旧品井沼周辺ため池群もこの一翼を担っている。ここでは旧品井沼周辺ため池群を世界農業遺産として保全し次世代へ継承するための方策について検証する。

1993年に大崎市鹿島台の里山に位置する中核ため池でシナイモツゴとゼニタナゴが発見され<sup>1)</sup>、その後、現地における聞き取り調査によりこれらは旧品井沼に由来することが明らかになった<sup>2)</sup>（図1、2、3）。しかし、1995年から近隣のため池でバス釣りが大流行し、幹線道路近くのほとんどのため池にオオクチバスが侵入して大繁殖した。バスの侵入前後における魚類相調査の結果から、侵入後のため池ではモツゴやタイリクバラタナゴなど小型魚類の全滅が確認された。2001年にはシナイモツゴ生息池の一つでオオクチバスが捕獲され、シナイモツゴやゼニタナゴの生息が危機的な状況に陥った。このため、当会が呼び掛けて2002年8月に初めて池干しによるバス駆除を実施した。



図1 シナイモツゴが再発見されたため池  
旧品井沼周辺ため池群の中核的なため池

これ以来、周辺のため池で地域住民と共に、毎年、オオクチバスが侵入したため池の池干しを行い完全駆除してきた。さらに、遺伝的多様性に配慮しながら、シナイモツゴとゼニタナゴをバス駆除したため池などへ移植放流し生息池を増やしてきた<sup>3)</sup>。



図 2 1993年に再発見されたシナイモツゴ 品井沼由来の個体群



図 3 同時に発見されたゼニタナゴ 品井沼由来の個体群

これにより、周辺ため池のほとんどからオオクチバスを一掃し、シナイモツゴとゼニタナゴ両方の生息池 4 ヲ所とシナイモツゴの生息池 1 ヲ所を増やすことに成功した。さらに、これらのため池を水源とする小河川では上中流部でオオクチバスが姿を消し、タモロコなど小型魚類やエビ類が多数出現し、シナイモツゴとゼニタナゴも観察できるようになった。さらに 2013 年からはウナギが確認され住民を驚かせた。この河川では、毎年、地域住民や都市部の市民と共に生き物観察会を開催し、多くの人々に小川の生き物の復元を実感してもらっている。



図 4 ため池を水源とする小川の生き物調査、地域住民と小学生が参加して毎年実施

しかし、桂沢ため池ではゼニタナゴが減少し 2006 年にゼニタナゴが 1 尾採集されたのを最後に、二枚貝への産卵観察を含め毎年の調査で確認出来なくなったことから、残念ながら全滅した可能性が高い。2013～2015 年に、アメリカザリガニを駆除して環境整備を進めながら、移植先からゼニタナゴを里帰りさせた。その後は毎年、ゼニタナゴの繁殖が確認され、現在もアメリカザリガニの駆除を継続して二枚貝の繁殖を促しながらモニタリングを続けている。

一方、2011 年 3 月 11 日に旧品井沼周辺は震度 6 強の烈震に見舞われ、シナイモツゴやゼニタナゴが生息するため池の一部で排水設備が損傷漏水し水位が著しく低下した。しかし、地域住民の迅速な復旧作業により水位が回復し、5 月には多くの稚魚が水面に浮上し影響を最小限に留めることが出来た。

里山のため池はシナイモツゴやゼニタナゴなど絶滅危惧種の最後の生息場として極めて重要である。しかし、これらのため池では様々な外来種の侵入や

自然災害の発生により絶滅危惧種が全滅するリスクを常に抱えている。したがって適切な移植放流により生息池を拡大して危険分散を図り、同時に地域住民を主体とした安定的な保全体制を構築することにより絶滅危惧種を長期にわたって保全できると考えられる。

里山のため池は里地の水源であるが、現在、多くのため池にオオクチバスが生息し、ここで繁殖したバス稚魚が河川へ流出している。このような河川ではバスが群れを成して遊泳し魚類やエビ類を捕食している。鹿島台地区では、多くのため池からオオクチバスを一掃し稚魚の供給を遮断することにより、下流の小川からもバスを一掃することができた。また、高次捕食者のオオクチバスを駆除すると中間捕食者のアメリカザリガニが増えるので、これについても合理的な手法を駆使し低密度管理が可能になりつつある。これらの取り組みにより、里地の小川ではオオクチバスが姿を消して多くの小型魚類やエビ類がよみがえり、最近ではニホンウナギも出現するようになった（図5）。

旧品井沼周辺ため池群の取り組みと成果については、水辺の自然再生共同シンポジウムを東京や大崎市古川で毎年秋に開催して情報発信すると共に、数年分の成果をとりまとめ2017年7月に新刊本「よみがえる魚たち」を恒星社厚生閣から発刊した。今後は里山里地の水辺の自然再生と取り組みながら、全国の活動を支援していきたいと考えている。



図5 オオクチバスを駆除したため池を水源とする川で捕獲されたウナギ

#### 参考文献

- 1) 高橋清孝・門馬喜彦：シナイモツゴの再発見と人工繁殖，宮城内水試研，2，1-9(1995)．
- 2) 高橋清孝・藤本泰文：ため池の希少魚：自然災害から守る，魚類学雑誌，60（2），181-184(2013)．
- 3) 高橋清孝・進東健太郎・藤本泰文：ゼニタナゴの復元，細谷和海・高橋清孝（編），pp128-132，ブラックバスを退治する，恒星社厚生閣，東京（2006）．